

ESDの実践にどう取り組むか

—学校教育目標を見直し、教育課程の編成・実施で改革を進める



ESD、SDGs推進研究室長
／元東京都公立小学校長

手島利夫

ポイント

激変を続ける世界に正解はない。教師中心で答えを教える教育から、問題に気づき、教科の枠を越えて探究し、自ら変容する学習者主体の学びに向かって、教育の改革が求められている。学校も変わらねばならない。

教育目標を見直す

「持続可能な社会の創り手となることができるようにする」というのに、前時代的な「知・徳・体」といった教育目標で、（他人に言われたことに）「進んで取り組む」子どもを育て続けてどうするというのか。校長として責任をもって教育目標を改めることが重要である。その際、総合的な学習の時間の目標との関連を図るようにすることが必要だ。

教科等横断的カリキュラムを創る

従来の学校教育は、教科・領域ごとに学習指導要領で定められた指導内容をどの子にもわかるように、限られた授業時

数のなかで教えることが重視されてきた。しかし、今回の学習指導要領では、「理解していることをどう使うか」、学んだ結果を生かし「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という、思考力・判断力・表現力や学びに向かう人間性といった資質・能力の育成を目指している。

現実の世界では、たとえば「環境の問題」一つとってみても、今や理科の教育だけで解決できる問題ではない。工業等の生産や、政治、経済、消費と廃棄、生物や化学、気象、それらのデータ化に要する数理など、さまざまな要因が複雑に絡み合い、激しい変化のなかで推移している。

持続可能な社会の創り手を育むのなら、教科のなかで知識や技能を学び、その結果をテストして終わらせるだけでなく、学びの成果をさまざまな場面で結びつけ、活用し、関連づけながら問題の解決に役立てる力が求められているのである。総合的な学習（探究）の時間の活用が重視されているのは、このためである。

2006年、江東区立東雲小学校でE

図1 第6学年 「未来にはばたけ」学習カレンダー（部分） © 江東区立八名川小学校

教科領域	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語		① SDGsの視点から未来について、自分の考えをもつ			未来がよりよくなるために					
算数							⑤ これからの日本について考える			
理科										
社会		② 戦争中の生活や人々の願いを知る		長く続いた戦争と人々の暮らし	新しい日本、平和な日本へ		⑧ 世界の現状を見つめ自分の生き方・学び方について考える			
総合		③ 将来の夢について考え、自分を見つめる		未来にはばたけ！		世界が100人の村だったら				
英語										
特活		⑥ 自分がなりたい職業を選び、実現への道筋を調べる					八名川まつり	卒業式		
道徳									⑦ 調べたことを地域・保護者に発表する	
音楽										
図工		④ 将来の自分の姿を想像し、立体作品を作る			12年後の私					
体育										
家庭										
<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> 環境の教育 多文化理解 人権・命の教育 学習スキル </div>										

SD（持続可能な開発のための教育）を推進する工夫のなかからESDカレンダーが開発された。これは教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの好事例としてユネスコスクール等を通じて全国に

普及している。

このESDカレンダー（図1）は教科等横断的な学習のためのイメージマップである。同区立八名川小学校において、そこに指導のねらいや時間数、主体的な学習過程、地域や関係機関との連携先等を組み合わせ、総合的な学習の時間の年間指導計画としてさらに発展させた。

そして、毎年、児童が学びの成果を発表・交流し合う機会「八名川まつり」を設けて、指導を年々バージョンアップすることで、学校中の子どもたちがすばらしく意欲に満ちたスーパー小学生集団に育っていったのである。

子どもの学びに火をつけて、主体的・対話的で深い学びを創る

単元の導入の際、三つのステップ（図2）を工夫させ、子どもたちの心を揺さぶる指導力のある教師を育てよう。それが、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改革の出発点となるのだ。

教員に言われてノートをとる児童と、自ら問題意識をもち、燃える気持ちで学

びに向かっている児童が同じ成績になることなど、あるわけがない。

小学校でも中学校でも、子どもたちの学ぶ心に火がつかないようでは、調べても、まとめても、発表しても、結局は「や

図2 単元の導入で「子どもの学びに火をつける」際の三つのステップ

①	②	③
＜問題に気づかせる＞	＜火をつける＞	＜テーマを決める＞
1) 体験活動や提示資料をもとに基本的な事実と出会う 2) 体験したり資料を見たりしたことから、多様な気づきや感想などをもち、それを共有する	3) 教師が提示したり、子どもが調べたりして出合った矛盾する事実や意表をつく話や資料等から疑問を感じ、書き出す	4) グループや学級全体で疑問を出し合い、分類・整理してまとめ、 学習問題をつくる 5) 問題について、自分なりの予想をする
親しみ・憧れ・共感	それらをひっくり返す	疑問から学習問題へ

図3 学習指導要領の要点を踏まえた自校教育課程のチェックリスト

		キーワードの分類	教育改革に必要なキーワード	教育課程上の記載の有無	
学習指導要領の前文	教育理念	持続可能な社会の創り手の育成など教育目標に関するキーワード	持続可能な社会の創り手		
			生きる力		
			社会に開かれた（協働的な）教育課程（編成）		
学習指導要領の総則	教育課程の編成	教育目標の明確化（知徳体の見直し）	育成を目指す資質・能力を踏まえる		
			総合的な学習の時間の目標との関連を図る		
		カリキュラム・マネジメントによる教育活動の質の向上	カリキュラム・マネジメント		
			教科等横断的な指導		
	総合的な学習・探究の時間の充実				
	教育課程の実施	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	学び方	主体的（学びに火をつける導入の工夫）	
				対話的（協働的探究や発表場面の設定）	
				深い学び（多面的な思考・行動の変革）	
				探究的・問題解決的な学習過程	
		資質・能力	知識及び技能の習得		
思考力・判断力・表現力					
学びに向かう力・人間性					

らされる授業」あるいは「よい成績をもたらすための作業」にしかならない。そのような授業を受けさせられていたら、豊かな心だっって育ちにくい。

自校の教育課程の精度をチェックし、SDGs推進力の向上を図る

昭和までの「大量生産」時代の教育課程

程では、SDGsに貢献する教育はできない。

①教育目標の見直し

②カリキュラム・マネジメントの工夫

③主体的・対話的で

深い学びの実現に向けた授業改善

この3点を実現できる教育課程の編成と校内体制の整備ができてくるか。

図3の教育課程チェックリストを活用して、各校の実態を見直し、改善を図らねばならない。

このチェックリストは筆者ホームページ（<https://www.esd-tejima.com/newpage6.html>）に公開予定である。

ESDを踏まえて改訂された学習指導要領が示す視点から自校の教育課程の現状を精査する
※ 2021.11.04 手島利夫による再編と（ ）内の補足